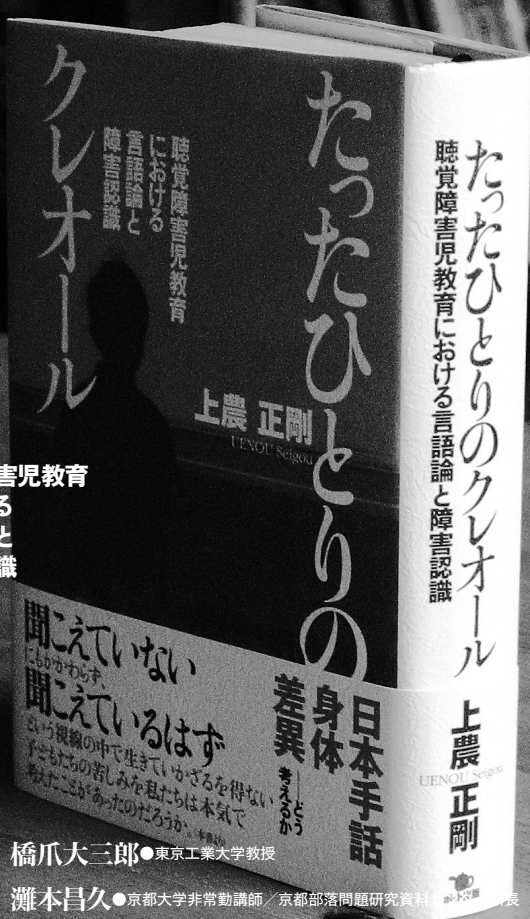


無料
【宣伝リーフレット】
発行◎ポット出版



たっただひとりのクレオール
聴覚障害児教育における言語論と障害認識

上農 正剛
UENO Seigo

たっただひとり
クレオール

聴覚障害児教育
における
言語論と
障害認識

聴覚障害児教育
における
言語論と
障害認識

『たっただひとりのクレオール』という1冊

- 橋爪大三郎 ● 東京工業大学教授
- 灘本昌久 ● 京都大学非常勤講師 / 京都部落問題研究資料館 館長
- 酒井邦嘉 ● 東京大学大学院総合文化研究科 助教授
- 立岩真也 ● 立命館大学大学院先端総合学術研究科助教授
- 福嶋 聡 ● ジュンク堂書店・池袋

日本手話
身体
差異
きえるか
きえないか

聞こえていない
聞こえてはいるはず
聞こえてはいるはず
聞こえてはいるはず

どう視線の中で生きていかなければならぬ
子どもたちの若しみを私たちは本気で
考えたことがあるのだろうか

聴覚障害の実態やそれを取りまく社会的文脈、
聴覚口話法の意義と限界、障害者の自己形成などを、
体系的に論じた書物

●橋爪大三郎

東京工業大学教授

まったく違った分野の専門書であるのに、ぐいぐいひき込まれ、強い印象を残す書物がある。たとえば、秋元波留夫氏の『失行症』（一九三六年初版、一九七六年再刊、東京大学出版会）。上農正剛氏の新著を手にとって、ずっと以前に読んだこの本のことを思い出した。

秋元氏は一九〇六年生まれ。医師として北海道に赴任し、炭鉱の事故から救出された患者を多く診療した。一酸化炭素中毒の結果、奇妙で独特の症状を呈する患者が多くいる。ものの形が認識できなかつたり（失認）、言葉の意味がわからなくなったり（失語）、特定の行為ができなくなったり（失行）。中毒により大脳が局部的に損傷を受け、それに対応する機能が障害されたためと考えられる。逆に考えるなら、健常者の大脳が、どれだけ局部にわかれているか、それぞれどういう機能を分担しているかを、そこから推測することができるわけだ。

秋元氏は、現場の診療を通じて失語、失認、失行といった病態にふれ、欧州の最新の研究を参照しな

から、症状の分類や診断基準、その発生の機序や治療方法をひとつずつ考え進めていった。特に、構成失行（マッチを擦ったり、パジャマを着たりといった種類の動作だけができなくなる）という障害のメカニズムを再構成するところなどは、議論の進め方にわくわくした。ひらがなや漢字が別々に失われるといった日本語特有の失語症の症例を報告分析したことも、大きな貢献だと敬服した。

上農氏の書物も、未踏の領域に踏み入って、病態の根幹を見極め、それに即した合理的な体系を組み立てていこうとする明快な意志に貫かれているところが、秋元氏とよく似ている。

上農氏が扱うのは、聴覚障害児である。出来あがった機能が途中から失われる場合（失行症）と、最初から失われている場合（聴覚障害）では、だいぶ事情が異なる。聴覚障害にもかかわらず、どのような方法で、それ以外の機能を十分に発達させるか。この方法をめぐる思索の格闘が、本書のなかみである。一般に見過ごされがちなことだが、視覚障害にくらべて、聴覚障害のほうが問題がむしる深刻である。視覚障害児（目が見えない子ども）は、生活上の不便はあっても、親とのコミュニケーションに問題がない。親は音声言語で、コミュニケーションを行なっている。視覚障害児は、その言語共同体に参加し、音声言語を通じて精神を形成し、教育を受けることができる。困難が生ずるのは、文字言語を使おうとしても目に見えないので使えない段階、すなわち学齢に達してからである。それ以前に、音声言語を習得し、それを媒介にして情緒や人格を形成することができる。

聴覚障害児（耳が聞こえない子ども）の親は、ほとんどが聴者（健常者）である。親の用いる音声言語を、子どもは聴くことができない。聴覚障害児は、親と言語コミュニケーションを行なうことができず、言語共同体に加わることができない。言語が獲得できなければ、情緒や人格など精神形成に大きな影響が

及ぶ。精神機能はもともと障害されていないのに、その発達に問題が起こるのを見過ごすことは、ゆゆしい問題、まさに人権問題である。

聴覚障害児には、とりあえず、二つの道しかなかった。第一は、音声言語をあきらめ、手話をコミュニケーション手段に選ぶこと。これは、聾者として生きることを意味する。第二は、困難をおして、音声言語を習得する道を選ぶこと。それには補聴器をつけ、唇のかたちを読み取り、発声練習を繰り返すという、ハードな訓練を重ねなければならぬ。

実際にはどちらも、大きなマイナスをとまなう。手話を身につけても、手話ができるとは限らない親や一般の人びとと、自由にコミュニケーションができるわけではない。手話（日本手話）は、日本語と語彙や文法が異なる。日本語と対応のつかない、もうひとつの言語（外国語）なのだ。したがって、漢字やひらがななど日本の文字言語も、容易には身につかない。聾者同士が語りあう、孤立した手話の言語共同体に閉じ込められてしまう結果となる。かと言って、音声言語を選択しても、現実の状況で聴き取りや発話ができるレベルにまで、音声言語を身につけることはむずかしい。そして、この困難をどうにか乗り越えたとしても、聴者の世界に対等なメンバーとして受け入れられるわけではないのである。それならば、なるべくマイナスを小さくするために、両方を身につけるしかないのではないか。聾学校は、そうした環境と訓練を提供するものであるべきだろうと思う。

ところが、日本の聾学校は、手話の使用を禁止してきた。上農氏にお目にかかった八年前にこのことを確認して、私は改めて怒りをおぼえた。日本語の習得に邪魔になるからという。手話への偏見もあるかもしれない。聴覚に障害をもって生まれた子どもたちは、障害そのものに加えて、不十分で非科学的

な教育環境をも耐え忍び、そのもとで苦しまなければならぬのである。

その聾学校の生徒数が、急激に減少しつつあるという。補聴器をつけて音声言語を聴き取り、音声言語を発音する「聴覚口話法」にもとづいて、一般の学級で学ぶインテグレーション（インテ）教育が一般的になったからだ。子どもの「聴こえない」現実を認めたくない親たちや、聴覚口話法をよかれと推進する教師たちによって、インテ教育が推進されている。聴覚障害児の言語能力は、一般の学級の「自然な環境」で、無理なく習得されるはずだった。だが現実には、言葉を聞き取ることができず、クラスから疎外され、勉強にもついていけないという大部分の聴覚障害児たちの実態がある。そしてそれは、とりかえしがつかなくなるまで放置されているのだ。

上農氏は、聴覚障害児の教育指導に長年取り組み、数多くの障害児たちや親たちの苦しみ、聴覚口話法の矛盾、聾教育の実際を見てきた。本書は、そうした経験を踏まえて、聴覚障害児教育の根本的な見直しを提案する、画期的な書物である。言語学や哲学の知見が随所に織り込まれ、時間をかけて温められたアイデアがくっきり打ち出されている。聴覚障害児をもつ親たちや聴覚障害児を教える教師たちはもちろん、聴覚障害者本人、言語や障害や福祉に関心をもつ人びとすべてにとつての、必読書であると思う。聴覚障害の実態やそれととりまく社会的文脈、聴覚口話法の意義と限界、障害者の自己形成などを、これほど体系的に論じた書物は、おそらく初めてなのではないか。

聴覚口話法の問題点とは何だろう。聴者が大部分のクラスで意思疎通ができず、孤立していく。授業がわからず、学力が停滞する。親とのコミュニケーションもうまくゆかず、家族としての交流が十分でない。「自然な環境」を重視する結果、躰けや社会的訓練がおろそかになる。どれもその通りである。

だがとりわけ上農氏が強調するのは、人間精神の発達にとって、言語の運用能力の獲得が本質的に重要であること、そして、聴覚口話法のみによっては、その能力が決して十分に身につかないことだ。

そこで上農氏は、聴覚口話法とは別に、言語の運用能力を獲得することが大切であると説く。それが、書記言語（文字の読み書き）の重視であり、手話言語の重視である。聴覚障害者は、自覚的なバイリンガルの学習者として自己形成するのが正しい。少なくとも一種類の言語を、人生の早い時期に、十分に使いこなせるようになること。精神の発達にとって、このことは本質的である。そして、聴覚口話法では、これは不可能なのだ。

見知らぬ異国に移住した親たちが、不完全なカタコトの外国語（ピジン）をしゃべっていたとしても、それを聞いて育つ子どもたちは、それを流暢なもうひとつの母語（クレオール）に変えてしまうという。子どもたちには、障害を乗り越えて進む内発的なエネルギーがそなわっている。『たったひとりのクレオール』というタイトルには、聴覚障害児の孤独と、それを見つめる著者の希望に満ちた激励の視線とがこめられている。

（書き下ろし）

はしづめ・だいさぶろう

一九四八年神奈川県に生まれる

東京大学文学部社会科学卒業 同大学院社会学研究科博士課程修了

一九八九年より東京工業大学に勤務

現在、同大学院社会学研究科価値システム専攻教授

●著書

- 『言語ゲームと社会理論』(勁草書房)
『仏教の言説戦略』(勁草書房)
『はじめての構造主義』(講談社現代新書・講談社)
『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)
『現代思想はいま何を考えればよいのか』(勁草書房)
『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)
『僕の憲法草案』(ポット出版、共著)
『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(勁草書房)
『性愛論』(岩波書店)
『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)
『橋爪大三郎の社会学講義2』(夏目書房)
『選択・責任・連帯の教育改革【完全版】』(勁草書房、共著)
『こんなに困った北朝鮮』(メタローグ)
『言語派社会学の原理』(洋泉社)
『天皇の戦争責任』(径書房、共著)
『幸福のつくりかた』(ポット出版)
『世界がわかる宗教社会学入門』(筑摩書房)
『政治の教室』(PHP新書・PHP研究所)
『心』はあるのか——シリーズ・人間学①(ちくま新書・筑摩書房)
『人間にとって法とは何か』(PHP新書・PHP研究所)
『永遠の吉本隆明』(洋泉社新書V・洋泉社)、などがある

およそ差別論に興味のある人に 本書を強くお奨めする

●灘本昌久

京都大学大学院文学研究科非常勤講師・社会学「差別論」／京都部落問題研究資料センター所長

久しぶりにうならされる力作である。差別論に限れば、五年に一冊出るかでないか。そう書いてみて、この五年間にこれと比肩しうる作品があったかと思いついても、思い当たるものがないので、十年に一冊出るか出ないかの傑作といっても過言ではないと思う。

私は、差別問題で重要なことは、いかに差別をなくすかよりも、いかに被差別者が差別と向き合うかであると考えてきた。差別をなくすための行動は、そのあとに自然とついてくるものだと思っている。しかし、山のように出版される人権・差別問題系の出版物は、差別を糾弾し、その非倫理性を断罪することに急ではあるが、被差別者の生きていく土台を打ち固めるような内実、すなわち「差別といかに向き合うか」という課題がおろそかにされていることが多い。

また、差別と向き合うときに陥りがちな問題として、劣位にあるという現実や不安を埋め合わせるために、被差別者の美点を探り出して強調してみたり、被差別者の欠点をその被差別の歴史を理由に過小評価する「被差別割引」を発動してみたり、ともかく、差別・被差別の現実を直視しきれずに、なにご

とかで埋め合わせようという傾向がある。水平社宣言にある「吾々がエタである事を誇り得る時が来た」という魅力的なフレーズでさえ、無自覚に使えば、傾いた天秤のバランスを取るための分銅に過ぎなくなる。上農氏の著作は、そうした傾向から驚くほど無縁である。

氏にとって、聴覚障害児（難聴児）が生きていくうえで根本的なことは、聴覚障害児のアイデンティティをいかに十全なものにしていくかということに尽きる。私流に言い換えるならば、聴覚障害であることといかに向き合うかというスタンスである。そのことは、言語習得技術論や難聴児に対する差別への批判（このふたつはある意味で反対方向の極論であろう）で達成されるわけではなく、難聴児自身が自分で思索していく手段としていかに言語を獲得していくべきかということが中軸となって組み立てられている。

どのようにして言語を獲得していくべきか。難聴児は、いきなり岐路に立たされる。聴覚口話法（口の形と補聴器によるわずかの音をたよりに言葉を読み取る）を習得するか（ここでいう日本手話は、いわゆる「手話」≡日本語に身振り手振りを貼り付けた「日本語対応手話」とは違い、文法的にまったく日本語とは違う外国語のようなものであるが、逆に言語としては完璧に細部まで表現できる。ふたつの「手話」については同書一四〇頁参照）。

聴覚口話法は、健聴者とのコミュニケーションを重視するが、実際には難聴者にとって徒労に終わるケースが多い。一方、日本手話は、それを使う聾者の間でしか通じず、それだけでは日本語を理解するようにはならない。上農氏は、日本手話と書記日本語（書かれた日本語）という二つの言語の獲得を必須とするのだが、難聴児が、もっとも適切なプロセスで言語を獲得するに至るには、さまざまな落とし穴

がある。

そのひとつに、聴覚障害であることを否定する心理からくる聴覚口話法への傾斜がある。まれに聴覚口話法により、コミュニケーションの手段を獲得する難聴児がいるが、多くは徒勞に終わるばかりでなく、下手をすると、日本手話も体得できないために、バイリンガルどころか一つの言葉も満足には習得できないセミリンガル状態になってしまう。そして、難聴児は親子の間でさえコミュニケーション不全に陥り、友人にも心を閉ざして孤立していく。また、インテグレーション（統合教育）という一見理想的に感じられる教育にも、落とし穴がある。言葉は「自然に」獲得されるといふ思い込みにより、しばしば難聴児が実際には放置されるのである。

この他、上農氏によって難聴児が置かれている環境の問題性が、次々に明るみにされていく。そしてその際、誰も悪玉にされず、また誰もかばわれることなく、時として、難聴者自身や家族さえも、その体内から病巣を無慈悲にえぐりだされていく。読んでいると、そうした問題の困難さにたじろいでしまうのだが、しかし、その困難さの先にしか難聴児の未来はないと確信させられる。障害者問題に関心のあるなしにかかわらず、およそ差別論に興味のある人には本書を強くお奨めする。

（初出●京都部落問題研究資料センターメールマガジン、二〇〇三年一月四日号）

なだもと・まさひさ

一九五六年四月六日神戸市に生まれる

一九八一年三月・京都大学文学部史学科現代史専攻卒業

一九八六年三月・大阪教育大学大学院教育学研究科修了
一九九三年四月より京都産業大学専任講師（九七年より助教授）
二〇〇〇年七月より京都部落問題研究資料センター所長

●著書

『ちびくろサンボ』絶版を考える』（径書房）

『井手の部落史』（京都部落史研究所）

『部落の過去・現在・そして…』（阿吽社）

『ちびくろサンボよ すこやかによみがえれ』（径書房）

●翻訳

『ちびくろさんぼのおはなし』（径書房）

●監修

『The Story of Little Black Sambo』（径書房）

バイリンガル・バイカルチュラル言語文化教育に
教育学のみならず、言語学や脳科学からの新しい
アプローチが必要

●酒井邦嘉

東京大学大学院総合文化研究科助教授

著者の上農氏とは、第三〇回言語・聴能教育実践夏期講座（二〇〇三年）で初めてお会いしたばかりであるが、真摯なそして優しい眼差しが印象的であった。本書は、まさに上農氏の真摯で優しい心からのメッセージである。該博な知識と教育の実践に裏打ちされた、著者渾身の教育論である。

「たったひとりのクレオール」というタイトルは、逆説的であると同時に、本書が対象とする聴覚障害児教育の困難な現状を象徴している。クレオールとは、不完全な言語環境で育った子供たちが自然に生み出す、完全な文法規則を備えた言語のことである。共通の言葉でなければ仲間同士で話が通じないのだから、たったひとりしか使わないクレオールは本来言葉として使えないはずである。ところが、聴者である母親とろう者である子供の間では、母の音声は完全に子に伝わらず、母の手話も不完全であるために、音声または手話を通してクレオール化が生ずるかもしれないのである。もしもクレオール化

が成功して意思の疎通ができるようになったとしても、それは社会で使われている言葉から孤立した言語にならざるを得ない。これは奥深い矛盾である。

わが国のろう学校の教員がほとんど聴者であるという現状からわかるように、これまでの聴覚障害児教育は、聞こえない子供たちをいかに聴者の社会に「統合（インテグレート）」するか、という視点が主流であった。その結果、不完全な音声言語に基づく「たったひとりのクレオール」を現実に生み出して来たのではないだろうか。本書では、この過酷な状況を経て大人になった人たちの心の葛藤が、実際の例を通して明らかにされる。聞こえない子供たちにとって本当に必要とされる教育とは何だろうか、いったい何が保障されなくてはならないのだろうか。本書の問題提起の重要性は、聴者からろう者への視点の転換にある。

二〇〇三年五月二七日、全国のろう児とその親たち一〇七人が、「日本手話をろう教育の選択肢のひとつとすること」を求め、日本弁護士連合会に対し人権救済の申し立てをした。これは、ろう者の視点に立った改革の確実な前進の兆しである。その一方で、新生児聴覚スクリーニング検査が各地で実施され、聴覚障害の「早期発見」が行われつつあるにもかかわらず、補聴器の装着や人工内耳の手術は、未だ聴覚の補助的役割を果たすのに止まっているという現実がある。著者は、あくまで冷静に、「私の目には状況はむしろ「混迷」の只中に突入し始めたという方があるかに事実在即しているように見える」と分析している。聞こえない子供たちのための教育環境の整備は、決して他人事では済まされない、焦

眉の急である。

本書の最後では、聴覚障害児教育における読み書き能力（書記日本語）の獲得の問題が掘り下げられている。日本手話を母語として獲得させ、第二言語として書記日本語の習得を目指すとする「バイリンガル・バイカルチュラル（二言語二文化）教育」を、著者は基本的に支持しているが、理想論に陥ることなく現状の分析はやはり冷徹である。実際、手話の視覚的音韻（手指の動きや、うなずき、視線の方向など）を文字の音韻に転換する際の問題点について言及している。この問題の解決には、教育学のみならず言語学や脳科学からの新しいアプローチが必要であろう。

「聞こえないという身体状況でこの世界にやってきた子どもたちが、聞こえない人として大切にされ、きちんとした教育を受け、この世界の成り立ちをしっかり認識し、愛する者と出会い、立派な聞こえない人として、堂々と、そして、静かに生きていける——そのような状況が可能になるためには、一体何が必要なのでしょう。」このように問いかける本書は、多くの人々の心を揺さぶり続けるに違いない。

（書き下ろし）

さかい・くによし

一九六四年（昭和三九年）、東京に生まれる

一九八七年、東京大学理学部物理学科卒業

一九九二年、同大学院理学系研究科博士課程修了
理学博士。同年、同大医学部助手

一九九五年、ハーバード大学医学部リサーチフェロー

≪「言語・哲学科訪問研究員を経て

現在、東京大学大学院総合文化研究科助教

●著書

『心にいとむ認知脳科学』（岩波書店）

『言語の脳科学 脳はどのようにことばを生み出すか』（中公新書・中央公論新社）

障害の子どもたちが「統合」を
求めてきたことをもつともだと思おう立場を維持した上でも、
著者の「統合」否定はわかる

●立岩真也

立命館大学大学院先端総合学術研究科助教

最近出た上農正剛の本を簡単に紹介する。珍しい名前の人だが「うえのうせいごう」と読む。一九五四年生、聞こえない子どもの個人指導に一七年間携わる。一九九九年より九州保健福祉大学保健科学部言語聴覚療法学科専任講師。クレオールとは聞き慣れない言葉だが長くなるので解説は略。

副題は「聴覚障害児教育における言語論と障害認識」というこの本のことに入る前に、ごくごく短くすると次のような指摘、主張がなされているのをご存知だろうか。

自分たちが使う手話は日本語に身振りを対応させたものではなく、独立した別の言語であり、その自分たちは独自の文化、「ろう文化」を有する集団であり、その意味での「聾者」である（聾者でない人になりたいのではなく、「聴覚障害者」とは呼ばれたくない）。このように事実認識の変更の要求と自らのあり方についての主張がなされてきた。ここ数年、関連してかなりの数の本が出ている。私はほとんど追えていない。別の回で紹介できればと思う。

さて、手話は言語で、聾者には聾者の文化があるというのは、まずはもつとも、その通りと言う他ない。それを人が知らないなら周知させるために繰り返し返す必要があるが、知るだけならひとまず知れば一段落つくことではある。そして上農のこの本は講演を集めたものだというから、やはりそんな本かもしれないと思い、正直なところを言えば、読む前にそれほどの期待はなかった。しかしこの本は、実際にはそれで終わらないところから始まっている。そして、この本はたしかに（論文も含むが多くは）講演を収録した本なのだが、知っている人は知っていることをわかりやすく薄めて繰り返したものを集めた本にはなっていない。聴衆との間に緊張を生じさせる大切なことを語ろうとし、実際に語った、緊張感を伴う言葉の記録になっている。



たとえば一九九七年、文字放送のことや国際交流のことがたくさん語られた難聴児の親の会の会議での講演で筆者は次のように語る。「私の目には、足下を踏み固めた後でなければ言っても仕方のない事柄が次から次に熱心に語られているように見えて仕方がありませんでした。足下にある切実な現実の問題は一体どうなっているのだろうか。何か議論する順番が根本的に違うのではないだろうか。このような複雑な思いが最後まで消えませんでした。」（三〇ページ）

そんなことはこの（医療や教育や福祉や…）業界ではよくある、と思った人がいるはずだ。たいていの講演は、あらかじめ受け入れられることがわかっている場で受け入れられることが話される。講演に

限らない。時には何かを言わないために別の何かを——多分それ自体は間違いではない何かを——言うということもある。この講演はそうではない。そして言われるべきことが言われないこと自体を問題にし、批判しようとする相手がいる場で話している。しかし大切なことだから言おうと思うのだし、やはり聞きたい人がいるから彼も招かれ話しに行くのだ。

さて何が問題とされない問題なのか。「聴覚口話法」という方法がある。この方法は「補聴器の活用により残存能力を活用させ、それを前提として、聴覚障害児に音声言語の能力（聞き取りと発音）を獲得させることを目指す言語指導法」（四一ページ）である。さきに述べたように、手話への評価が少し変わってきたことにも伴い、いささかの変化は見られるが、これが今まで主流の方法だ。しかし筆者はそれがうまくいかないことが多くあること、だがそのことがはっきりさせられないままになっていて、その結果さらにうまくいかないことが生じてしまうことを言う。

実際には聞こえないのに聞こえることにされている場、聞こえなければ努力が足りないとされる場にいる子どもたちの経験、そうした場を経て大人になっていく人たちの経験が描かれる。現実がこうして作られているなら、そうなってしまおうなと思う。それがさきに筆者が「足下にある切実な現実の問題」と述べた問題だ。引用の続きは以下。

「一言で言えば、インテグレーションの現状を直視している者には、現実から、かなり距離のある所の話であり、真に考えなければならぬ問題の優先順序からすると、取り組む問題の順番が何か基本的なズレているのではないかと感じられる風景でした。」（三〇ページ）

その「インテグレーション」について注では「統合教育。障害児を通常学校に「統合」し、非障害児

と一緒に教育を受けさせる教育方法。聴覚障害児の場合は、聾学校に行くのではなく、聴児たちの通う通常学級で学ばせることを意味する。」(二七ページ)と説明される。この世界に独特な略し方で「インテ」と言われることもあり、そしてとくに当人たちから否定的に捉えられることがある。それと完全に同じ立場からではないにしても、著者もまた問題点を指摘する。聴覚口話法でなんとかなることにされた上で、その子は聴覚に障害のない子といっしょの「統合された環境」に置かれるのだが、なんとかならない、そしてそれに気づかないことにされている、そしてそれで困るのはその子たちだと言う。

他方、多くは身体障害や知的障害の子どもたちやその親の中に、「統合」を求め、そして認められてこなかった人たちがいる。私はその人たちの主張がもっともだと思ってきたし、それは今でも変わらない。そして、その立場を維持した上でも、著者の言うことはわかる、二つは両立しうると思う。だがそう思いながらも、この違いをどのように説明すればよいのか、その前に、ここに提起されている問題をどう考えるか、この課題がある。おもしろいとばかりは言っていられないが、おもしろい。

そして聴覚障害の人が教育を受け言葉を使っていく上での困難は、一方で日本手話を第一の言語としながら、その次の言語として日本語を習得するという「バイリンガル」という——多くの聾者の支持を受けてきている——方向をとっても完全に解消されはしない。まず、二つの大きく異なる(がそのこともよく知られているわけではない)言語を学ぶことと自分がなかなかたいへんそうだ。

教育の現場に「自然」においておけばそのうちなんとかなる(ことにする)といった態度があるが、実際にはなんともならず、それで不利益を被るのは聴覚障害の子たち、やがては大人なのだと言者は言う。それはまったくその通りだと思う。だがそうならば、つまり、たくさん勉強しなければならぬと

いうことではないだろうか。実際、著者の答はそういう答だとも言える——正確に紹介しないと誤解されるだろうから、ここは読んでいただくでしょう。

ならば、いわゆる聴児に比した場合、聴覚障害の子は多く苦勞しなければならぬということ、そして苦勞して同じだけになるのも容易でないようにも思う。となると、やはり聴覚障害の子ども・人が損をしている感じは残り、そのことに納得できない部分は残る。これは、聴覚障害の人に固有な部分もあるとともに、多数派の中にある様々な（言語的・文化的）少数者たちがどのようにやっていったらいいのか、あるいは多数派はどのように対すればよいのかを考えることでもある。



むろん著者もそのことを考えないわけがない。主には後半で展開される「障害受容」でなく「障害認識」という提起がこの問いへの筆者の応じ方である。

聴覚障害者に限らず、障害受容という言葉にむっとくる障害者はとても多いのだが、そのことも知らない人もまた多い。あるいは、こうした否定こそ障害が受容できていないことだと言ってしまう。そう言われる相手は、そのように言いくるめられてしまう言葉としてのこの言葉が不快であるというのである。

著者はこの言葉が機能するメカニズム、言われる本人が納得できない理由を第八章「障害「受容」から障害「認識」へ」で解析する——この章は『紀要』の論文がもとになっている。さらに、一方で「障

「害受容」を言いながら、他方で聴覚口話法を教えることがダブル・バインドを引き起こすことを述べている。病者や障害者に関わる仕事をしているなら、そんなことを毎日しているかも、と思わない人は少ないはずだ。

そのことを確認した上で著者は、「障害認識」を対置させる。つまり先に私が述べた、「結局たくさん勉強しろってことかい」という疑問に「障害を受容しなさい（それに関わる不利についてはがまんしなさい）」というのでない障害の捉え方、認識をもつことが必要なだと答える。その中味は本に書いてある。私は基本的にそれに異論がない。「認識すれば（認識を変えれば）それでよいのか」と言う人もいるかもしれないが、それに対しては「そんなことは誰も言っていない」とまず答えられる。その上で、見方を変えることの大切さはそれとして確実にあると言えるはずだ。たださらにその上でなお考えることがあると思う。こうしてこの本は現に存在する（があまり詰められることのない）課題を私たちに示していく。



筆者は『現代思想』二〇〇三年一月号（青土社、税込一三〇〇円、特集…争点としての生命）にも「医療の論理、言語の論理——聴覚障害児にとつてのベネフィットとは何か」という論文を書いている。この論文もこの特集も紹介しようと思ったが紙数が尽きた。私も書いていて、その分は手前味噌だが、この特集号はお勧めです。

（初出●『看護教育』二〇〇三年一二月号、発行・医学書院）

たていわ・しんや

一九六〇年、佐渡島に生まれる

一九九〇年東京大学大学院社会学研究科博士課程修了

立命館大学大学院先端総合学術研究科助教。専攻、社会学

●著書

『自由の平等——簡単に別な姿の世界』(岩波書店、二〇〇四年一月)

『弱くある自由へ——自己決定・介護・生死の技術——』(青土社、二〇〇〇年一〇月)

『私的所有論』(勁草書房、一九九七年九月)

直接触れることのできる書物は、
聴覚障害者にとって健聴者以上に重要

●福嶋 聡

ジュンク堂書店・池袋

一月一一日（火）竹内敏晴氏、一二日（水）石井正之氏と、ぼくが担当するトークセッションが二夜連続であった。両日とも手話通訳の方に来ていただいた。もちろん、聴覚障害者のお客様の参加があったからだ。

経緯はこうである。一〇月二六日（日）の夜、トークセッションの受付を担当しているサービスクーナーから内線があり、「一二日と二日のトーク、手話通訳を付けていただけのならば参加したいというお客様がお見えなのですが……」と告げられた。最初虚をつかれたぼくは程なくハッと思い当たり、すぐにサービスクーナーに向かった。予想通り、そのお客様は、その日のトークセッションに参加されていた、聴覚障害を持つTさんだった。

その日のトークは、講談社ノンフィクション賞を取った『こんな夜更けにバナナかよ』（渡辺一史著、北海道新聞社）をめぐるものだった。開演前に会場である四階喫茶にいたぼくは、Tさんの存在に気づき、担当者から講師の手配で手話通訳の方も来られていることを知った。その時のぼくは、「なる

ほど、テーマがテーマだけにそういうこともあるのだな。」という程度の認識だった。サービスクーナーからの内線にハッとしたのはそのためである。その日の状況が、約二週間後に自分が企画しているトークセッションにも生じうるということを想像もしていなかった不明を恥じたのである。

竹内氏はほぼ成人するまで難聴者として苦しみ、言葉を自由に操れるようになったのは四〇歳を過ぎてから、という演出家である。九七年に『顔面漂流記』で「顔にアザのあるジャーナリスト」としてデビューした石井氏の今回のテーマとなった本は『肉体不平等』だ。聴覚障害を持つTさんが何としても「聞き」たい、と思うのは、当然であった。手話の出来ないぼくは、Tさんと筆談で「会話」しながら、何とか努力してご参加いただけるようにしたい、と約束した。

さっそく、翌日からいくつかの方面に助力を依頼し、竹内さんの伝手で紹介された通訳者の方に両日ともお願いすることができた。Tさんへの連絡はEメールで行ない、もちろんTさんは両日とも参加下さった。終了後「参加できてとても有意義だった」という内容の感謝のメールを下さり、「これからも参加したい企画があれば、無理をお願いしたい」と書かれていた。ぼくは「できるかぎり努力するので、遠慮なく申し出て下さい」と返信した。

ちょうどその頃、ポット出版の、『たったひとりのクレオール』をたまたま読んでいたのも不思議な縁だった。この本は、長年聴覚障害児・難聴児の教育に携わり、また思索を深めてきた上農正剛氏が論文や講演をまとめたものであり、そうした世界に余り縁のないぼくにも、極めて刺激的で示唆的な本であった。

周囲の無理解や、皮肉にももっとも近しい人たちである親や医師、教師たちのいわば「善意」（実は

エゴイズム)によって、聴覚障害児・者がいかに不利益を蒙ってきたかが、切々と語られる。教育実践者であると同時に哲学研究者である上農氏は、具体的な事例を掲げながらも声高な告発をするわけではなく、この本質を冷静に見極めようとする。もちろん、それは何よりも聴覚障害児・者への寄与を指していることである。

たくさんの人に掛け値なしに薦めたい、新鮮な刺激に満ちたこの本は、読者一人ひとりに多くの発見をもたらし、新たな思考を促すと思われるが、書店人であるぼくにとって、特に重要に思われたのは、聴覚障害者にとって、「聴覚口話法」「書記日本語」「手話」が、全く別個の言語であり、(ぼくらが想像するように、たとえ「翻訳」のような形であれある種のリンクが張られているのではなく)それぞれの間は完全に寸断されている、という事実である。

話題になった本の著者に来ていただいて話をしてもらおう「トークセッション」という企画において、本とトークは地続きである。内容的にそうであることはもちろん、本を書くという行為と、語るという行為、即ち書かれた表現と語られた表現は、地続きである。ぼくは、確かにそう思っていた。でなければ、著書めぐって語って下さいと著者に依頼する「トークセッション」の企画自体が生まれない。

しかし、明らかに聴覚障害者にとってはそうではない。「聴覚口話法」と「書記日本語」はふたつの別々の言語なのだ。聴覚障害者は「書記日本語」による書物には直接触れることが出来るが、その書物を巡る「トーク」に触れるためには、手話通訳者の介在が不可欠なのである。「トークセッション」における前述のエピソードが物語るのは、この単純な、しかし重要な事実なのだ。

ぼくら書店人にとって特に重要なのは、直接触れることのできる書物という形態が、聴覚障害者にと

って健聴者以上に重要だ、ということである。上農氏によれば、読書を通じてハンディキャップを乗り越え、「エリート」への道をたどった聴覚障害児も多いという。ただし、「多くは自分一人だけで没頭した読書や暗記型の勉強で身につけたもの」（『たったひとりのクレオール』四一九頁）でしかない経験や知識は、聴覚障害者「エリート」にとって新たな問題をもたらす。また、「書記日本語」に習熟することが、逆に「日本手話」の習得に弊害をもたらすということもあるらしい。（ここでは十分に紹介できないので、是非『たったひとりのクレオール』をお読み下さい。重ねて、推薦します。）

しかし、「読書とは書かれた言葉を通して『他者』の思考と出会う体験であり、その意味で異文化理解への非常に重要な入り口」（同二二〇頁）であることに間違いはなく、『他者』の思考と出会う体験が人間にとって不可欠なものである以上、書物が聴覚障害者にとって健聴者以上に重要だと言っても誤りではないのではないか、と思う。

ならば、書店現場にもっと聴覚障害を持つお客様がいらしていても不思議ではない。そうではないのは、手話通訳を含めて、われわれ書店側に、そうしたお客様を迎える準備と構えがそもそも出来ていないからではないか。

「トークセッション」での手話通訳の依頼。ほんの小さな出来事が、こんな反省にまで、ぼくを連れて来てくれた。

（初出●人文書院ウェブサイトで連載コラム『本屋とコンピュータ』二〇〇三年十一月二六日）

ふくしま・あきら

一九五六年に生まれる

京都大学文学部哲学科卒業

一九八二年・ジュンク堂書店に就職、サンバル店（神戸）勤務

一九八八年・京都店、人文書売り場を担当、のち副店長

仙台店店長を経て、現在、池袋本店副店長

●著書

『劇場としての書店』（新評論）

『書店人のしごと—SA時代の販売戦略』（三一書房）

『書店人のこころ』（三一書房）

第1章 インテグレーション再考

1	インテグレーションの現状と課題……………26
	はじめに……………26
	1 インテグレーションの現状……………34
	2 インテグレーションの課題……………54
3	根本問題——コミュニケーション・言語力・学力……………86
	4 補遺……………102
	おわりに……………106
2	難聴児の自己形成方略——インテグレーションの「成功例」とは何だったのか……………110
	1 インテグレーションの「成功例」……………110
	2 〈聞こえなさ〉の中の自己形成方略……………112
3	アイデンティティの再構築方略とその問題……………133
	4 「第三の世界」問題……………138
5	今後の課題……………150
3	聾学校の在籍生徒数はなぜ減ったのか?……………156
	理由ははっきりしていたのではなかったか……………157
	学力保障という本質問題……………160
4	混乱と転換の季節の中で——変わることに変わらないこと……………164
	1 デフ・フリースクールからの異議申し立て……………166
	2 聾学校の統廃合……………171
	3 特別支援学校構想……………175
	4 「学校生活支援員」制度……………177
5	新生児聴覚スクリーニング検査……………180
	6 変わることに変わらないこと……………184

5 聞こえない子どもたちは何のために勉強するのか……………188

はじめに……………188 1 学力問題……………193 2 親の願望……………195

3 親の願望の底に隠されている無意識……………198 4 聞こえない子どもにとっての勉強の目的……………203

5 言語力と思考力……………214 6 「言語力」ということをどのように考えるか……………215

7 書記日本語という問題……………218 おわりに……………224

6 聴覚障害児の学習とこころは……………228

はじめに……………228 1 なぜ学力が問題にされるのか……………229 2 学力不振・低学力の原因は何か……………234

聴覚障害児にとって「学力」とは何か……………248 4 障害観の問い直し——アイデンティティの問題……………253

5 学習上の基本的考慮点……………256 最後に……………258

3

7 難聴児の学力について——その前提認識……………260

1 はじめに……………260 2 二つの話……………262 3 前提認識の再確認……………272 4 難聴学級……………279

5 自然主義的対応の問題……………286

障害認識論

8 障害「受容」から障害「認識」へ……………294

はじめに——障害観の問い直し……………294 1 障害受容……………297 2 障害認識という考え方の骨格……………303

3 実践への適用……………312
おわりに……………319

9 聴覚障害児教育における障害認識とアイデンティティ……………322

- 1 講演テーマについて……………323
- 2 障害認識に対する現状の受け取り方……………325
- 3 講演の構成——結果から原因へ……………327
- 4 問題を考える際の「土台」としての障害認識……………331
- 5 現実の諸問題……………336
- 6 無意識の中にある価値観……………346
- 7 否定的自己像の形成……………351
- 8 「理解」に到達する方法は一つではない……………358
- 9 障害認識論という思考方法……………361

10 ありのままの感情から深い理解へ——お母さんへのメッセージ……………372

- 名古屋の皆様へ……………372
- 1 すべてに先行し、すべてを決定する親の障害「認識」……………374
- 2 障害に対する無意識の否定的感情……………376
- 3 正直な感情を認めることからの再出発……………379
- 4 親自身の持続的学習の必要性……………383

11 彼らがいる場所——難聴児と読書……………388

- 1 私たちは本を読まなくなった……………388
- 2 読書についての基本的問い……………389
- 3 難聴児がいる場所——「境界」……………392
- 4 〈自己イメージ〉という問題……………393
- 5 〈変容〉ということの意味……………396
- 6 難聴児にとつての読書の本質的意味……………398

リテラシー論

12 リテラシー問題を議論する際の前提条件……………404

1	なぜ前提条件を問題にするのか……………	404
2	聾教育でのリテラシー獲得状況——教育実践とその現実的結果……………	408
3	リテラシー能力獲得児は何を物語っているか……………	412
4	リテラシー教育の目的は何なのか……………	418
5	考え方の根底にある言語観の問題——自然主義的言語観……………	423
6	言語獲得の中の書記日本語の位置づけ……………	432
7	最後に……………	445
13	聴覚障害児教育における言語観と学力問題……………	448
1	「言語」という見落とされてきた根本的視点……………	448
2	言語獲得システム……………	452
3	音韻論という考え方……………	455
4	日本手話の研究と導入がもたらす新たな課題……………	458
5	これからの学力問題——手話とリテラシー問題……………	463
	障害認識論とヒルバーク的立場——どうして私たちはそんなことをしたのでしょ……………	468
	あとがき……………	476
	文献表……………	481
	人名索引……………	485
	事項索引……………	505

上農正剛（うえのう・せいこう）
 一九五四年熊本県生まれ。早稲田大学文学部卒業後、聞こえない子どもの個人指導（学習・言語指導）に一七年間携わる。この間に、聴覚障害児を持つ母親を対象に「難聴児学習問題研究会」を主宰。トータルコミュニケーション研究会運営委員、「ろう教育を考える全国討論集会」共同研究者を務めるほか、近年は、障害認識論とリテラシー論についての講演多数。
 一九九九年より九州保健福祉大学保健科学部言語聴覚療法学科専任講師。

[2003.10 刊]

たったひとりのクレオール

著●上農正剛

定価●2,700円＋税 ISBN4-939015-55-6 C0036

四六判(128×188)上製

512ページ

[2003.09 刊]

可能性としての家族

著●小浜逸郎

家族という共同体の本質とは？

性愛や結婚や夫婦関係、親子関係の、疑問や迷いを大元から考える、小浜逸郎の思想の原点。1988年刊・大和書房刊行版の復刊。新規に索引をプラス。さらに復刊にあたって著者の書き下ろしもあり。晩婚化や少子化が進む今の私たちに必要な「家族論」です。

定価●2,500円＋税 ISBN4-939015-52-1 C0036

[2001.09 刊]

激論！ひきこもり

対談●工藤定次×斎藤環 構成●永富奈津恵

全国のお家庭に出向き、ひきこもりを外に出す実践を続けてきた民間支援団体・タメ塾の工藤定次。臨床医師として診療室でひきこもりの治療に当たってきた精神科医・斎藤環。これまで対立していると見られてきた二人が、この対談で初めて出会いひきこもりをめぐるさまざまなテーマに対して、10時間以上にわたって激論を交わした徹底討論集。

定価●1,700円＋税 ISBN4-939015-37-8 C0037

[2000.12 刊]

幸福のつくりかた

著●橋爪大三郎

「自分が個人として、何を考え、どう行動すべきなのかについて、言葉（日本語）を用いて徹底的に考える。同時に、社会の現状とあるべき姿についても、同じように徹底的に考えていく。そういうことを、なるべく大勢の日本人がいますぐ始めないかぎり、日本はこのまま、ずるずると駄目になっていくほかはない、と私は思う」（本書より）

定価●1,900円＋税 ISBN4-939015-29-7 C0036

無料宣伝リーフレット

『たったひとりのクレオール』という1冊

2004年1月31日

ポット出版

〒150-0001 渋谷区神宮前2-33-18#303

tel 03-3478-1774 fax 03-3402-5558

<http://www.pot.co.jp/>e-mail books@pot.co.jp